
狂言テキストにおける 感動詞「シシ申」の歴史的研究

深津周太

1 はじめに

過去のテキストを対象に、実際の用例の調査・観察に重点を置く日本語の歴史的研究において、極めて談話的な要素であるためにテキストに反映され難い感動詞を観察の対象とすることは、おのずから資料上の制約を受けることとなる。しかし、特に対話という場においてこそ出現する談話的要素である感動詞の歴史を捉えることは、話しことばの実態と変遷を探る上で有益であろう。

本稿は、一般的に中・近世の口語を反映するといわれる狂言資料において、呼びかけの感動詞として用いられる「シシ^{まうし}申」という形式の歴史的展開と、その変化に関わる要因の解明を目指す。特に対象とするテキストは、大蔵流の狂言台本『虎明本』¹⁾(1642/寛永19)と『虎寛本』²⁾(1792/寛政4)という150年の年月を隔てた同流派の台本である。本稿では、両台本における「シシ申」の使用実態の対照を行い、両台本の間にはいかなる差異があるか、またその差異を生ぜしめた変化がいかなるものであったかを明らかにする。

2 問題の所在

17世紀中頃の奥書をもつ大蔵流『虎明本』(以下、虎明本)には、感動詞の類が多く出現する。これは狂言資料全般に見受けられる特徴であるといえ、一般に中世末期の口語的要素を含むとされる抄物やキリシタン資料の類とも、その点においては一線を画する。抄物は一種の講義録であり、感動詞の使用はあまり認められない。キリシタン資料には、その会話部分や辞書・文典などの記述からある程度の用例を見出すことができるが、狂言における感動詞の頻出はそれらをはるかに凌ぐとあってよい。特に対話形式の劇である狂言において頻出するのが、対他的な呼びかけに用いる感動詞である。

しかし、感動詞そのものを扱った研究は、日本語史の分野においてほとんど蓄積が無いといってよい。これはテキストとの兼ね合いにおいて、中世以前の統計的データを得がたいことに起因するものであろう。また、感動詞を音韻論の問題の上で言及することの困難は明らかであるし³⁾、独立語である以上、構文論の対象ともなりがたい⁴⁾という事実も、感動詞研究の意義を不透明にしている。よって必然的に、研究の視野は感動詞そのものを論じるものに絞られる。20世紀前半以降、それらは品詞論的な位置付けに関する議論が中心であり⁵⁾、近年では感動詞が言語構造の中にかに位置づけられるかという、より本質的な問いかけがなされる⁶⁾。ただし、田窪(2005)が述べるように「感動詞が言語構造のなかでどのように位置づけられるかについての研究はまだ始まったばかり」である。この問題を考察する中で、感動詞の歴史的な面を無視することはできない。

本稿は、狂言テキストに見られる呼びかけの感動詞のうち、「シシ申」(「シイシイ申」⁷⁾)の歴史的変容について、変化の実態とその意味の解明を目的とする。具体的には、虎明本における「シシ申」の共時的位置付けと、虎寛本におけるそれとを明らかにすることから始める。先述の通り、感動詞はそれ自体「言語記号として認められるか」といった根本的課題を内包するが、他者への積極的な発話である呼びかけの感動詞については、システムティックな使い分けが存在することは容易に予想され、実際に指摘もなされる⁸⁾。よって本稿では、積極的に構造的見方を取り入れ、呼びかけの感動詞の研究にも、そのような説明原理が有効であることを示す。虎明本・虎寛本における「シシ申」の記述は、呼びかけの感動詞の共時的システムの解明に通じており、待遇表現研究への寄与となる。

また、感動詞の変遷を明らかにすることは、話しことばの歴史的変遷に対する一つのアプローチとなるはずである。

3 虎明本から虎寛本へ

3.1 虎明本における「シシ申」

虎明本の言語資料としての価値は、その記述態度にある。虎明本の狂言台本としての性格は、従来在台本におけるそれとは大きく異なる。流派を特定できない室町期の台本で、現存最古の狂言テキストである『天正狂言本』⁹⁾(1578/天正6、以下、天正本)には筋書き程度の記述しかなされず、台詞をそのまま書写した部分は極めて少ない。和泉流『狂言六義』¹⁰⁾(1645前後/寛永～正保頃、以下、天理本)の含む情報量は天正本に比すれば圧倒的に増加しているが、ここでも台詞そのものではなく、その内容をト書きで示すにとどまる。その点で記述態度としては天理本も天正本の延長線上にあるといえる。一方虎明本は、台詞そのものを厳密に反映させており、特に口語資料として利用価値が高いといえよう。

先述の通り、呼びかけの感動詞のような談話的要素が文献上に露出することが、狂言以前のテキストにはあまり期待できない以上¹¹⁾、まとまった数の用例を提供し、同時代の他流派台本や先後関係にある同流派の台本という共時的・通時的な比較に適したテキストを有する虎明本を、呼びかけ感動詞の歴史的研究の拠点とすることは妥当であると考える。

3.1.1 虎明本における「シシ申」

そこでまず、虎明本に見られる「シシ申」の共時的位置付けを確認することからはじめる。虎明本には、「ナウ、ナウナウ、^{まうし まうしまうし}申、申々、ヤア、ヤイ、ヤイヤイ、^{ものも あ(ん)ないも}物申、案内申」など多彩な呼びかけの感動詞が見られる。「シシ申」の価値はこれらの形式との関係から相対的に決定することができる。虎明本の「シシ申」の全用例は以下の通りである。

- (1) 是へわつはと申て参程に、つれがあまたあるかとぞんずれば只一人じや、是に言葉をかけう、しゝ申 (虎明本・餅酒／加賀の百姓→越前の百姓)
- (2) 是へわつはと申て参る程に、つれがあるかとぞんじたれば只一人じや、是はよささうな者じやほどに、是に声をかけて見う、しいへ申 (虎明本・鼻取相撲／太郎冠者→新座の者)
- (3) 是へ参る者は、一段よささふなものじや、言葉をかけう、しいへ申 (虎明本・秀句傘／太郎冠者→新座の者)
- (4) 是へ一だんの物が参る、ことばをかけう、しいへ申 ナウへトモ言 (虎明本・昆布売／大名→昆布売)

『昆布柿』『雁鴻金』の同場面には、ト書きで「もちさけのことく(、)ことばをかけて」とある。また、『松葉』には、「餅酒のことく」、『三人夫』『筑紫の奥』にはそれぞれ「つねのことく互に言葉をかけ」「常の百姓のことく言葉をかくる」というト書きが見られる。これらは全て〈百姓→百姓〉の使用である。したがって、虎明本における「シシ申」は実質的には、顕示される(1)~(4)の4例にこの5例を加えた9例が存在することになる。

河原(1996)は、「虎明本において「しいしい」が単独で用いられるのは、騒ぎや発言を制止したり、邪魔ものを追い払ったりするときである」とし、(1)や(2)に「これをわつはと申て参(る)程に」とある事から、相手が話したり何かに夢中になっていることを「中断して申し訳ないが……」という気持ちを添えるものと指摘する。しかし後述するように、虎明本の「シシ申」は語形式として捉えるべきである。また、ある語の共時的な機能と、その語の起源あるいは過去の通時的側面は無関係であるかぎり、それを共時的説明の論拠とするのは方法論上問題がある上、話し手の主観的な感情は証明の手立てがなくこれを記述に盛り込むことは意味をなさない。本稿は用例の分布から客観的

な解釈を施すにとどめる。

(1)～(4)には、「シシ申」「シイシイ申」という2つの形態を挙げた。「シシ(申)」と「シイシイ(申)」は語形から推して自由変異である可能性が高く、文脈もきわめて類似している。これは、他の狂言台本を援用することでさらに補強することができる。

例えば、1642年書写の虎明本とほぼ同時期の1645年頃の奥書をもつ天理本に、「シイシイ申」とある部分が、鷺流忠政本¹²⁾(1678/延宝6)の対応箇所です。「シシ申」とある。

(5) (茶屋)「しいへ申 (僧)「なに事そ (天理本・薩摩守/下50オ)¹³⁾

(6) シシ申御坊お茶マイレ (忠政本・薩摩守/茶屋→僧)¹⁴⁾

忠政本には「シシ申」がこの1例しか見られないが、18世紀後半の虎寛本では全例が「シシ申」の形をとる(3.2に詳述)。また「申」にはこのような文脈での使用が見られないことから、これらを「申」の1用法としてではなく、1つの語形式として捉えることができる。よって「シシ申ーシイシイ申」を自由変異とみなし、以下「シシ申」で表記を統一する。

3.1.2 〈最初の呼びかけ〉としての「シシ申」

対的な呼びかけに用いられる感動詞は、場面的条件と待遇的条件によって使い分けられることが考えられる。実証的な立場をとる限り、場面による分類の要因は、テキストの文脈からでも確実な解釈が可能なるものが望ましい。そこで本稿では、〈最初の呼びかけか否か〉という二元的分類を試みる。

このような〈最初の呼びかけか否か〉という条件で、虎明本における呼びかけの感動詞を分類すると、表1のようになる。表には〈最初の呼びかけ〉を「最初」、それ以外を「会話中」と示す。「シシ申」の用例数に()内に+で示す数字は、3.1.1で示したト書きで示される例数である。この場合は、顕在する「シシ申」4例も、ト書きから推定される「シシ申」5例も、全て〈最初の呼びかけ〉に用いられることを指す。以下の表でも同様に表記する。

表1によれば、最初の呼びかけにのみ用いられるのは「シシ申」「ヤア」「物申」「案内申」の四形式である。このうち、「物申」「案内申」は、照井(1983)などの指摘に見られるように、〈訪問時の呼びかけ〉専門の形式と理解して問題ない。その点でこれらは特殊な場面に用いられる形式として、〈最初の呼びかけ〉から、さらに独立させることができよう。

(7) もの申、爰をあけさしませ (虎明本・鈍太郎/どん太郎→女 p. 487)

(8) 鬼「あんなひ申 女「たそ (虎明本・節分/p. 67)

上に挙げたような「物申」「案内申」を除くと、虎明本において「シシ申」は同じく〈最初の呼びかけ〉に用いられる「ヤア」と同場面で用いられることになる。「ヤア」は以下の通りである。

- (9) やあそなたはなににしにおじやつた
(虎明本・乞髷／舅→髷 p. 619)
- (10) みかどきこしめされ、やああのすうり、こなたへとめされしかは
(虎明本・酔薑／帝→酔売 p. 136)
- (11) やあそのはじかみうり、こなたへとめされ候程に (虎明本・酔薑／帝→薑売 p. 136)

表 1

	最初	会話中
申	3	21
申々	10	53
ナウ	0	58
ナウナウ	8	44
ヤイ	7	100
ヤイヤイ	12	78
ヤア	3	0
ヤレ	0	25
ヤレヤレ	0	9
シシ申	4 (+5)	0
物申	94	0
案内申	11	0

同じ場面に用いられる語形式の対立の要因として考察すべきは、待遇的要因であろう。従来の研究において待遇的要因として立てられるのは、身分的上下関係が主である。そこで、「シシ申」と「ヤア」を身分的上下関係で分類する。

表 2

	シシ申	ヤア
〈上位→下位〉の呼びかけ	1	3
〈対等〉の呼びかけ	3 (+5)	0
〈下位→上位〉の呼びかけ	0	0

表 2 からは、〈上位→下位〉の場合には「ヤア」を、〈対等〉の場合には「シシ申」を用いるという、ある程度の傾向が窺える。しかし厳密には「シシ申」の 1 例が〈上位→下位〉に用いられており、完全に相補的ではない。いわば例外的である〈上位→下位〉の「シシ申」は、3.1.1 で用例 (4) として挙げた例である。改めて以下に示す。

- (4) 是へーだんの物が参る、ことばをかけう、しい〜申 ナウ〜トモ云
(虎明本昆布売／大名→昆布売)

この例には、「ナウ〜トモ云」という注記が付されていることに注意したい。つまり (4) は、身分的上下関係の視座において他の「シシ申」と異なる分布を見せることと、唯一注記が付されていることとの 2 つの点で marked である。

3.1.3 「ナウ〜トモ云」は何を意味するか

この「ナウ〜トモ云」という注記 (図 1 参照) の示す意味としては、素朴に、次のような 2 つの可能性が考えられる。

- ①この例に限らず、「シシ申」は「ナウナウ」と任意に言い換えることが可能である。すなわち「シシ申」と「ナウナウ」は変異の関係にあり、両形式は語形式として同じ価値を持つ。
- ②(4)の用例に現れる「シシ申」に限って例外的に「ナウナウ」と言い換えることが可能。

この注記が示す意味について考察するにあたって、「ナウナウ」について述べておく必要がある。これは、虎明本にも見られる感動詞「ナウ」の畳語形であり、基本的には〈対等〉以下の相手あるいは親族間や夫婦間で用いられる、気安い呼びかけの部類に入ると言ってもよからう。

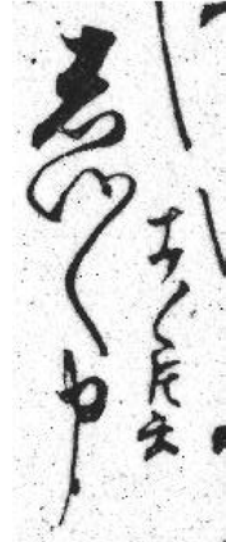


図1

- (12) なふ 〱 そなたは、理ふ尽なことをいふ人じや
(虎明本・犬山伏／茶屋→山伏 p. 670)
- (13) なふ 〱 なんぞうたはしめといへは、どこへゆくぞ
(虎明本・猿座頭／句当→妻 p. 828)

しかし、3.1.2の表1から分かるように、「ナウ」は〈最初の呼びかけ〉としての用法が存在しないのに対し、「ナウナウ」は8例が最初の呼びかけに用いられる。その中で、以下のような用例があることに注目したい。これらは「シシ申」同様に、きわめて固定的な場面で用いられる。

- (14) 洛中に住居いたす心もすぐになひ者で御ざる、いなか者とみえて、わつはと申、是にあたつてみうと存る、なふ 〱 (虎明本・末広がり／すっぱ→冠者)
- (15) 洛中に住居いたす、心のすぐにもなひもので御ざる、いなかものとみえて、はつはと申、罷出てたらひて、鳥目をとらうとぞんずる、なふ 〱 (虎明本・張蛸／すっぱ→冠者)
- (16) 是は洛中にすまゐいたす、心もすぐになひ者でござる、田舎者と見えて、むさとした事を申てありく、罷出て鳥目をとらふと存る、なふ 〱 (虎明本・目近籠骨／すっぱ→冠者)
- (17) 是は洛中に住居いたす、心もすぐになひ者でござる、いなか者と見えて、何やらわつはと申、ちとあたつてみうと存る、なふ 〱 (虎明本・粟田口／すっぱ→冠者)
- (18) あれほどけぶかひさるはなひ、なふ 〱 (虎明本・靱猿／大名→猿引)

とはいえ、両者が同じような文脈に用いられることから、ただちに「ナウへトモ云」が、「シシ申」と「ナウナウ」の任意的な言い換えの許容を意味するとみなすことはできまい。本稿では、この注記が「シシ申」と「ナウナウ」が変異の関係にあることを示すものではなく、(4)の例が何らかの特殊性を有することを表示するものとする。さらに、この特殊性が(4)の例が身分的上下関係による分類において例外的であることと関連付けて捉えることで、2つの問題の統一的な解決を試みる。

「ナウナウ」について、(14)～(18)には主従関係のような明らかな身分的上下関係を見出すことはできない。しかし、都の人であるすっぱは、田舎者の冠者より優位に立ち、大名は猿引に対して慇懃な態度を取ることが、それぞれの用いる形式から窺える。

例えば(19)では、売手が「おりやる」を用いるのに対し、太郎冠者は「御座る」を用いている。山崎(1963)は、「御座る」は「おりやる」より上位待遇の形式であることを明らかにしている¹⁵⁾。また(20)では、大名が「行く」を用いるのに対し猿引は「参る」を用いる。

(19) (売手)「都に人おほいといへども、某が、すゑひろがりやの亭主でおりやるよ
(太郎冠者)「それは誠に仕合で御ざる、さらは追付かいましたい
(虎明本・末広がり)

(20) (大名)「中へあれにはどちへ行ぞ (猿引)「どれへと申事もござらぬ、方々に
旦那衆がござるに依て、よばせらるゝかたへ参る (虎明本鞆猿)

ここから、「ナウナウ」は〈上位→下位〉(少なくとも〈対等〉以下)の形式と見てよいだろう。「シシ申」の(1)～(3)と比して、相対的により気安い呼びかけであることは確かである。

さて、(4)の「シシ申」の例は、(1)～(3)がいずれも〈対等〉であるのに対し、唯一〈上位→下位〉の使用であった。「シシ申」と「ナウナウ」を身分的上下関係から整理すると、表3のようになる。

表3

	シシ申	ナウナウ
〈上位→下位〉の呼びかけ	1	5
〈対等〉の呼びかけ	3 (+5)	0
〈下位→上位〉の呼びかけ	0	0

表3の分布を見ると、身分的上下関係の面から言えば、(4)はむしろ「ナウナウ」の領域に属するものと考えられる。従って「ナウへトモ云」は、この例に限って「シシ申」を「ナウナウ」と言い換えても文脈としておかしくないことを示したものであろう。

それどころか、むしろ積極的に、本来は「ノウへ」を用いるほうが自然であったと理解すべきではないか。それにも関わらず(4)では「シシ申」が用いられるために、わざわざこのような注記が付されたと考えるべきである。「シシ申」と「ノウノウ」が任意に言い換えられるという理解が当時一般にあったのならば、あえて注記する理由はない。

3.1.4 「ノウへトモ云」が付された理由

3.1.4.1 テキストの性質を根拠として

3.1.3で述べたように、(4)の「シシ申」に「ノウへトモ云」という注記が付されたのは、虎明本の論理に沿えば、本来「ノウノウ」が用いられるべき場面で「シシ申」が用いられたためという積極的な理由があると考えられる。そこで次に、何故(4)では「シシ申」を用いたかという、より本質的な問題を考察したい。

あえて注記を付してまで、当時の待遇システムにとって合理的でない形式を用いる以上、そこには「シシ申」を使用する必然性があったと見るべきではないか。文法的に求められる形式でないなら、これは表現性を追及したものと見るのが妥当であろう。つまり、あえて非合理的な形式を用いることで、何らかのニュアンスを施すことを目的としたものと考えられる。すなわち(4)での「シシ申」は、テキストそのものにとって必然的な選択だったのではないか。そこで本稿では、この問題に対して狂言というテキストのもつ性質に基づいた解釈を施すことを試みる。

言語研究の立場において、内省のきかない過去の言語に対して、言語外的要因を根拠とした論述を施すことの危険性は否定しえない。よって本稿でも可能な限り客観的な立場をとるべく、用例の分布に基礎をおく構造主義的な見地からの考察を行ってきた。しかし亀井他(1967)の指摘にあるように、「文学的な言語作品を資料とする場合、当然のこととして、文学的作品のもつ本領への理解を心がけねばなら」ないこともまた確かであろう。

狂言の本質は「笑い」に求められる。金水他(2008)は、「シリアスなテーマを洗練された古典美の中で表現しようとした」能のテキストが、室町時代初期にすでに固定化が進んでいたことに対して、狂言テキストには「メモ的な台本しか存在しなかった」¹⁶⁾ことに触れ、狂言の本質について次のように述べる。

- (21) 狂言が目指したのは日常生活の中で立ち上がってくる「笑い」である。笑いは、生きた肉体的・生理的・即時的な反応であり、舞台と観客が一体となって作り出すものである。固定化されたテキストからは、すでに生きた笑いは生まれてこない。狂言が生命をもった笑いの芸能として成立し得た時代には、定まったテキストは生まれようもなかった。

テキストの記述態度から、能と狂言の劇としての性質の異なりを明らかにしている。ここで改めて(4)を提示して検証していきたい。

- (4) 是へーだんの物が参る、ことばをかけう、しいへ申 ナウへトモ云
(虎明本・昆布売／大名→昆布売)

大名は外出時には、自分の刀を冠者に持たせるのが一般的である。しかし(4)の場面では大名は冠者を連れておらず、「自身太刀をもつて」いる状態である。そこで大名は、(22)のように道中で出会った人物に自分の刀を持たせようという悪巧みをもって、通りかかった昆布売に声をかける。

- (22) 路次にてよひ者にもあふたらは、おもしろおかしう申て、太刀をもたせうと存る
(虎明本・昆布売／大名独白)

背景に上手く言いくるめたいという下心があるために、大名という地位にあるにも関わらず、商人である昆布売に「しいへ申」と丁寧な物言いをするとところに滑稽さがある。観客は(22)の大名の独白で悪巧みを聞いているから、あえて大名が当時の言語感覚とはずれた物言いをした理由に見当が付き、そこで笑いが生じたと考えられる。つまり狂言には、秀句のような、それ自体「笑い」のために存在する表現のみならず、ことばの使い方による「笑い」も機能していたと言ってよかろう。

このように(4)の例に見られる〈上位→下位〉の「シシ申」の使用は、作者である虎明が、大名にあえてそのような言語行動をとらせ、意図的なずれを生じさせたものである。そうあってこそ、この例にわざわざ「ナウへトモ云」という注記が付されたことの説明がつく。亀井他(1967)は次のように述べている。

- (23) 狂言は、ともかくも劇であり、文芸であるから、描かれていることが、つねに当時の現実そのままであるとは限らない。(略)一見なんでもないようなところにも、現実を足場にした虚構が推測できる。

ここでの例はまさに、虎明本の言語システムを逆手に取った虚構であるといえよう。さらにいえば、金水他(2008)のいうように、「笑い」は即時的なものであり、咄嗟に理解できなければ意味がないことから、「シシ申」が当時一般に用いられていたことが窺える。従って、この「シシ申」が狂言テキストにしか見られない理由も今後解決すべき問題である。

以上から、「シシ申」は原則として〈対等〉の相手に用いるものといえる。このよう

に考えれば、「シシ申」と「ナウナウ」の間には、表5のような排他的な使い分けが成立する。以上、身分的上下関係から、虎明本における「シシ申」の共時的な位置づけを明らかにした。

表4

〈上位→下位〉の呼びかけ	〈対等〉の呼びかけ	〈下位→上位〉の呼びかけ
ナウナウ	シシ申	用例なし

3.1.4.2 テキストレベルの問題として

ところで、例えば狂言記外五十番（1700／元禄13、以下、外篇）では、『昆布売』の同じ箇所「ナウナウ」が用いられている。

(24) や、てうべの者が参つた、ことバをかけふ、や、なふへ

(外篇・昆布売／巻1・5)

虎明本と同時期の大蔵流虎清本（1646／正保3）、あるいは天理本や忠政本には、該当箇所が存在しないため確認ができないが、この場面に「笑い」を取り入れるのは、虎明本の有するオリジナリティーであった可能性がある。

和泉家古本『六義』¹⁷⁾（1653～1693／承応2～元禄6年）の同場面には、「上カラ言葉ヲカクル、とれからとれへ行人そト云」とある。ここでも、「上カラ」とあるように、あえて「シシ申」を用いるような演出は見られない。

3.1.4.3 解釈の蓋然性

先にも述べた通り、テキストの性質を背景に置いた用例の解釈は、言語史研究の方法として確実とは言えず、よほどの裏付けをもって妥当性が主張されねばならない。しかし一方で例外的説明が可能であるにも関わらず、それを放棄することで適切な抽象化を見落とすことは避けねばならない。

つまり、ここでの具体的事例に当てて言えば、上位→下位の例が1例あることから「シシ申」は〈対等の相手へのあいさつの呼びかけ〉であるという仮説は成立しないという判断を下すことは、正しい抽象化を損なう可能性がある。逆に、〈対等の相手への最初の呼びかけ〉という仮説が成立するという立場をとるのであれば、仮説に当てはまらない1例には例外的説明がなされることが望ましい。

本稿でも実践するように、ある語の共時的な価値を明らかにするためには、構造的な概念による抽象化という作業は理論的に避け得ない。抽象化に例外はつきものであり、問題はどれだけ蓋然性を主張しうるかにかかってくるであろう。例外を例外として説明することができれば、その記述の正確さがより強く主張されるはずである。

もとより文脈を根拠にその表現性を云々することは語学的研究としては無意味であるが、以上に述べた捉え方は、データ上の例外的事項と、注釈の問題という2つの問題を関連付けて統一的に説明しうるものとして蓋然性があるだろう。

3.1.5 初対面か否かという条件

ところで、「ナウナウ」が〈上位→下位〉に用いられるとすると、3.1.2に述べた「ヤア」も同じく〈上位→下位〉の使用であったことから（表2参照）、身分的上下関係のみを指標とすると両者は同価値の単位ということになる。ここでは使い分けの要因を、他にも求めてみるべきではないだろうか。その際、先に〈最初の呼びかけか否か〉という場面差による分類をしたように、客観的に観察可能であることは当然のこととして、截然と区別される要因を立てるべきであろう。そこで、話し手にとって、聞き手が初対面の相手か、知っている相手かというテストを行う。ここまで述べてきた「シシ申」「ナウナウ」「ヤア」について、〈初対面か否か〉による分類をすると表5のようになる。

表5

	シシ申	ナウナウ	ヤア
初対面の相手に対して	4	5	2
知合いに対して	0	0	1

表6から分かるように、「ナウナウ」（例数は「シシ申」と同文脈に用いるものに限る）と「シシ申」は、〈初対面〉の相手にしか用いられない。よって「シシ申」「ナウナウ」は以下のように定義できる。

(25) 初対面の相手に対する最初の呼びかけ。

「ヤア」はこの定義から外れることとなる。従って、3.1.2に「シシ申」と「ヤア」は身分的上下関係による使い分けの傾向が見られると述べたが、「シシ申」と身分関係により対立するのはむしろ「ナウナウ」であり、「ヤア」はそれらと〈初対面か否か〉という要因によって、異なるレベルで使い分けられる関係にあるといえよう。

表5には「ヤア」にも初対面の相手に対しての2例が存在するが、これには疑問がないでもない。

(10) やああのすうり、こなたへとめされしかは (虎明本・酢薑／帝→商人)

(11) やあそのはじかみうり、こなたへとめされ候程に (虎明本・酢薑／帝→商人)

これらは、いずれも商人（酢売り、薑売り）の作り話である。果たして帝が「やあ」という明らかに卑俗な表現を用いるか疑問である。この場面では、二人の商人が、自分の売っているもの（酢、薑）がいかに価値あるものかを示すために、作り話をでっち上げている。それぞれが、帝が自分に対して親しげに接したということを示すために、このような表現をあえて用いたとは考えられないだろうか。ただしこれについては証明の手立てがなく、あくまで文脈からの推測にすぎない。ただしいずれにせよ、初対面の相手に限定的に用いるものか否かという点でこれらは差別化されるといってよい。

3.1.6 虎明本における「シシ申」の位置

以上に述べてきたようなところから、虎明本における呼びかけの感動詞全体の下位体系といえる、〈最初の呼びかけ〉に用いる感動詞の構造が浮き彫りになってくる。この中に、「シシ申」はいかに位置付けることができるだろうか。そのような観点から見た場合、「申」の豊語形「申々」にも〈初対面の相手への最初の呼びかけ〉の用例が見られることを述べておかねばならない。

(26) 是へ一段のつれがまいる、言葉をかけう、申々（虎明本・角水／津の国→播磨）

(27) 是へけうがつた者がまいるほどに、言葉をかけてみる、申々

（虎明本・蚊相撲／冠者→蚊の精）

(28) なふさてよひ女かな、在京の内に、あれほどの女はみた事が御ぎない、あれもさだめて子細が有てまいつた物であらふ、苦しからぬ事、言葉をかけてみる、申々

（虎明本・右流左止／男→女）

(29) 是へ出家が一人参る、よひつれじや程に言葉をかけう、申々

（虎明本・宗論／法華僧→浄土僧）

身分的上下関係から見れば(26)(29)は〈対等〉で、(27)も前後の言語形式から〈対等〉と見てよいと判断する¹⁸⁾。(28)は〈上位→下位〉の可能性はあるが、男から女への下心のある呼びかけであり、遜った物言いをする演出として例外的説明が可能である¹⁹⁾。よって「申々」は、身分的上下関係からは「シシ申」との違いは見られない。

また、いずれも初対面の相手に対する使用であることから、基本的に「申々」は「シシ申」と全く同じ文脈で用いられる。両者の価値が一致しているのなら、それぞれの形式は異なる価値を持つという体系の仮説に矛盾することになるが、これについては通時の事情が関わっている可能性が高い。4で詳しく述べる。

以上見てきたところをまとめると、〈初対面の相手に対する最初の呼びかけ〉の構造は表6のようになっている。

表 6

	初対面の相手に対して	知合いの相手に対して
上位→下位	ナウナウ	ヤア
対等	シシ申／申々	不明

「シシ申」と同じ用いられ方をする「申々」が存在するにも関わらず、先述の(4)の「シシ申」への注記は「申々トモ云」ではなく「ナウへトモ云」であったことに注意したい。

以上、3.1では構造言語学的立場から、〈初対面の相手への最初の呼びかけ〉に用いられる感動詞を整理し、その分布の解釈から、虎寛本における「シシ申」の価値を明らかにした。

3.2 虎寛本における「シシ申」

3.1で虎寛本における「シシ申」の記述を行ったことによって、「シシ申」の歴史的变化を観察するための土壌が整ったといえよう。虎寛本は、虎明本書写から150年後にあたる1792年の奥書を持つ狂言台本である。同流派の台本であるため流派による言語使用の違い²⁰⁾など、言語外的要素を極力排除できる点で、通時の研究に適した資料であるといえよう。

虎明本では、〈初対面の相手に対する最初の呼びかけ〉に「シシ申」「申々」「ナウナウ」の3パターンが存在した。しかし一方、大蔵流『虎寛本』においては、初対面の相手に対する最初の呼びかけは以下のように、2つのタイプに収束されている。

【ナウナウ、シシ申】

- (30) あれへ鄙者と見えて、何やらわつぽと申。ちと当て見うと存る。なうへ、しゝ申
(虎寛本・末広がり／すっぱ→太郎冠者 上 p. 93)
- (31) なうへ、しゝ申 (虎寛本・隠笠／すっぱ→太郎冠者 上 p. 123)
- (32) イヤ、是へ似合敷いものが参る。急で言葉を掛う。いやなうへ、しゝ申
(虎寛本・三人夫／百姓→百姓 上 p. 169)
- (33) (淡路) イヤ、是へも似合しいものが参る。詞をかけませう。(尾張) 夫が能う御ざらう。(淡路) なうへ、しゝ申 (虎寛本・三人夫／百姓→百姓)
- (34) イヤ、是へ一段のものが参る。急で言葉を掛う。なうへしゝ申
(虎寛本・今参／太郎冠者→今参)
- (35) イヤ、是へきやうがつた者が参る。詞をかけう。なうへしゝ申
(虎寛本・蚊相撲／冠者→蚊の精)
- (36) イヤ、是へ算置が参る。一算置せうと存る。なうへ、しゝ申
(虎寛本・居杭／亭主→算置)

- (37) イヤいやなうへ、シ申 (虎寛本／察化→太郎冠者 中 p. 135)
 (38) イヤなうへ、し申 (虎寛本・米市／立頭→借手)
 (39) イヤ、是へ似合しい者が参る。急で詞を掛う。イヤなうへ、し申
 (虎寛本・宗論／僧→僧)
 (40) (アドー) イヤ申、是へ似合しい出家が参ります。詞を掛けて見ませう。(略) イ
 ヤなうへ、し申 (虎寛本・不腹立／男→僧)
 (41) あれへ田舎者と見へて何やらわつぱと申。ちとあたつて見うと存る。なうへ、
し申 (虎寛本・仏師／すっぱ→田舎男)

【ナウナウ】

- (42) (シテ) イヤ申、是へ一段の者が参る。詞を掛ませう。(略) イヤ、なうへ。
 (虎寛本・二人大名／大名→通り)
 (43) イヤ、是へ一段の者が参る。急で詞を掛う。イヤなうへ (虎寛本・昆布売343)

特に、「ナウナウ、シシ申」の用例が大多数を占めている。これを虎明本の状況と比較してみた場合、少なくとも3つの問題が生じる。

- ①「シシ申」について、虎明本では形態として「シイシイ申／シシ申」という2つのバリエーションが見られたが、虎寛本では「シシ申」に統一されている。
 ②虎明本では「シシ申」が他の形式と共に起る例が見られなかったが、虎寛本では必ず「ナウナウ」と共に起る。

虎寛本では〈初対面の相手への最初の呼びかけ〉に用いる「ナウナウ」の用例が減少し、「申々」の例は存在しない。

4 変化の諸相

4.1 問題①について

問題①は形態の変化に関するものである。7モーラの長さをもつ「シイシイマウシ(申)」の、「シシマウシ(申)」という5モーラの形態への変化は、発話に用いるエネルギーの軽減を求めた、生理的な要因による言語変化と見てよからう。

虎明本に「シシ申」が1例見られるのは、「シイシイ申」シシ申」の過渡的段階が反映されたものと見てよからう。3.1に挙げたように、1645年頃書写の天理本に「シイシイ申」、1678年書写の忠政本に「シシ申」とあることは、「シイシイ申」シシ申」という変化が生じた事実を補強する。

- (5) (茶屋) しいへ申 (僧) なに事そ (天理本・薩摩守／茶屋→出家 50オ)

(6) しゝ申御坊お茶まいれ (忠政本・薩摩守／茶屋→出家)

ところで、大蔵虎光の著した『狂言不審紙』(1823～1827／文政6～10)に、「狂言に、のふへしゝ申ト云。サシスセソ、之々、是々、これへの義なるべし」とある。虎光の言わんとしたところが、「シシ申」の「シシ」は「コレコレ」を「之々、是々」と音で表現したものという理解を示すものだとすれば、これは歴史的事実を無視した虎光の誤認であると言わざるをえない。「シシ申」の前段階に「シイシイ申」という形態があったことは疑いないし、虎光本では「コレコレ」は感動詞として多用されているが、「シイシイ申」「シシ申」の両形式が見られる虎明本当時においては、「コレ」「コレコレ」は指示詞として用いられていたにとどまる(詳細は2008年度秋季日本語学会予稿集に掲載予定の筆者の論を参照されたい)。よって「シシ」を感動詞「コレコレ」出自とみなすことは不可能である。

4.2 問題②について

問題②については虎寛本の「ナウナウ、シシ申」が用いられる場面における話し手・聞き手の関係と虎明本のそれと対照させることで、解決できる。

表7

	虎寛本	虎明本
すっぱ→太郎冠者(田舎)	ナウナウ、シシ申(3)	ナウナウ(4)
百姓→百姓	ナウナウ、シシ申(2)	シシ申(1)(+5)
太郎冠者→新座の者(今参)	ナウナウ、シシ申(1)	シシ申(2)
冠者→蚊の精	ナウナウ、シシ申(1)	申々(1)
亭主→算置	ナウナウ、シシ申(1)	φ
察化→太郎冠者	ナウナウ、シシ申(1)	φ
立頭→借手	ナウナウ、シシ申(1)	φ
僧→僧	ナウナウ、シシ申(1)	申々(1)
男→僧	ナウナウ、シシ申(1)	φ

虎寛本の「ナウナウ、シシ申」が用いられる関係には、『虎明本』において「ナウナウ」が用いられた関係、「シシ申」「申々」が用いられた関係がいずれも含まれる。すなわちここで起こったのは、「ナウナウ／シシ申／申々」の境界線の解消であるといえよう。「ナウナウ」と「シシ申」を共起させることにより、虎明本でそれぞれが担っていた領域をまとめて表現できるようになっている(→図2参照)。

よって、問題③の「申々」が〈最初の呼びかけ〉に見られないことを併せて考えると、ここでは、『虎明本』で「シシ申」を1単位として認めたように、『虎寛本』では「ナウ

上位→下位	対等
ナウナウ	シシ申／申々
↓	
上位→下位／対等	
ナウナウ、シシ申	

図2

「シシ申」が1単位として、初対面の相手へのあいさつの呼びかけを、排他的に担うこととなったわけである。この変化が問題①の音の縮約をさらに促進させた可能性はあると思われる。「シシシ」がより長い語形式の一部になることで、「シシ申」あるいは「ナウナウ、シシ申」はすでに「シシシ」の語源とは関係なく、それ全体として一つの意味を有しているから、「シシシ」の部分で形態を変えたところで、意味表示において問題は生じない。より大きな複合語となることで、この変化が許容される条件が更に整ったと考えることができよう。

このように虎寛本では、虎明本で3つの形式「シシ申」「申々」「ナウナウ」が担っていた領域を、「ナウナウ、シシ申」という1形式がまとめて担うという、システムの整理が行われている。その要因が何であり、この変化にはいかなるメリットがあるかを検討する。

4.3 変化の要因

この変化は、パラディグマティックな関係にあった「シシ申」「申々」「ナウナウ」の3つの単位が1つに統一された点で、場面に応じて形式を選択するという負担が解消されている。図3に示す。「ナウナウ」単独の用例も2例存在するが、それについては4.5で述べる。

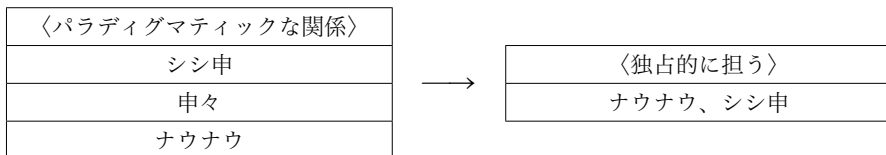


図3

ただし、このような経済的な変化の一方で、シntagマティックな面、すなわち語形の長さという面においては「ナウナウ」＝4モーラ、「マウシマウシ（申々）」＝6モーラ、「シシマウシ（申）」＝5モーラに対し、「ナウナウシシマウシ（申）」＝9モーラというように、負担は増加しているといえよう。話者が、より小さな単位（ここでは語）を所定の方法で結びつけて、新規の表現を創造することはめずらしいことではない。しかし、このような長い語形となるにも関わらず、全く新しい形式を産出することを避け、元々存在した単位を利用したことには、パラディグマティックな経済の要求という積極的な理由があったであろう。

3単位）1単位に収束するのに、新たな形式をリストに加えて元の3単位を捨ててし

まうのは、ここでの〈初対面の相手への最初の呼びかけ〉という閉じた領域の内のみならず感動詞体系全体、さらには言語体系全体から見ても、非経済的である。

同じようなことは、そもそも「シシ申」という単位が生み出された過程においても見られるのではないか。「シシ申」が担う領域をある形式で表現する欲求が生じた際に、元あった形式同士である、感動詞「シイシイ」と「申」を複合的に用いることで、新たな形式を増やすことなく、記憶の負担を軽減したものと考えられる。ここで「申」という形式が選択されていることから、「シシ申」はある程度敬意を込めた言い方であったに違いない。本稿ではそれを〈初対面の相手に対する〉という要因によるものと見た。

これらは、シンタグマティックな面での経済性のため音の縮約を果たした「シイシイ」>「シシ」とは平行して起こった、要求の方向を異にする変化である。

4.4 問題③について

「ナウナウ」と「シシ申」の境界が消滅したことについては、その身分関係による使い分けの解消（「ナウナウ」の2例の場合を除く）ということでは理解できるが、「申々」の用例が見られなくなったのはなぜか。以下に述べることは、現時点では仮説の段階にすぎないが、今後の課題として提出しておきたい。

ここまで、言語の経済の点から変化の説明を施してきたが、この中で、「ナウナウ」「申々」があいさつの呼びかけ語と会話中呼びかけ語に跨った用法を担っていたことにも注意しておく必要がある。虎明本において、「シシ申」「ナウナウ」「申々」の3パターンが存在したが、そのうち〈初対面の相手へのあいさつの呼びかけ〉専用の形式として用いられたのは「シシ申」のみであった。「ナウナウ」「申々」は、一般の呼びかけにも用いられ、むしろそちらの用例のほうが圧倒的に多い（3.1.2、表1参照）

通時的に見て「シシ申」という形式は、元来存在した感動詞「申」に「シシ（シイシイ）」を前接させたものであり、表現の欲求により臨時的に生み出されたものが定着したことが窺える。では、それ以前の段階では、〈初対面の相手への最初の呼びかけ〉はいかにして表現されていたであろうか。おそらく「ナウナウ：申々」がその領域を多義的に担い、待遇価値によって相補分布していたのではないか。

その後、〈初対面の相手への最初の呼びかけ〉を専門に担う形式「シシ申」が産出され、「申々」の領域に入り込んだことにより、両者は一時的に共存した結果、余剰となった古い形式の「申々」はその意味を失ったと憶測できる。これにより、「申々」は会話中の呼びかけに機能の範囲を狭め、「シシ申」は〈初対面の相手へのあいさつの呼びかけ〉の領域を継承して、両者はパラレルな関係になったのではないか。虎明本は、ちょうど両者が共存した時期を反映するものと見られる。

ただしこの仮説は、なぜ「申々」の領域にのみ新たな形式が入り込み、「ナウナウ」に対応する新規の形式が生じなかったかなど、解決すべき問題は多い。このような、「申」

「申々」「シイシイ申」といった「申」系感動詞の通時的考察については、稿を改めたい。

4.5 「ナウナウ」について

4.5.1 限定的な関係で用いられる「ナウナウ」

ここで、虎寛本の「ナウナウ」の2例について触れておかねばならない。4.2で見たように、「ナウナウ」と「シシ申」は「ナウナウ、シシ申」という複合的単位となり（「申々」もその中に吸収される）、虎明本で両者がそれぞれ担った領域を包括的に担うこととなっているのであるが、2例に限って「ナウナウ」が存在している。改めて2例を提示する。

- (44) シテ「イヤ申、是へ一段の者が参る。詞を掛ませう。アド「能う御座らう。シテ
「イヤ、なう〜」。 (虎寛本・二人大名/大名→通り)
- (45) イヤ、是へ一段の者が参る。急で詞を掛う。イヤなう〜 (虎寛本・昆布売)

これら2例に共通するのは、話し手が大名であるという点であり、これは(30)~(41)の「ナウナウ、シシ申」の例には見られず相補分布を示す。よって「ナウナウ」の使用には、〈話し手が大名であること〉が条件として加わると考えられる。

つまり、虎明本では[上位→下位：対等]という形で[ナウナウ：シシ申]が使い分けられていたが、虎寛本では上位→下位がさらに絞り込まれた〈大名→X〉という関係においてのみ「ナウナウ」が用いられる、[大名→X：それ以外の上位→下位・対等]というシステムになっているのである。

表8

〈上位→下位〉の呼びかけ		〈対等〉の呼びかけ	〈下位→上位〉の呼びかけ
大名→X	それ以外		
ナウナウ		シシ申	用例なし

それでも、形式を使い分ける場面は圧倒的に減ったわけであるから、パラダイグマティックな経済性は十分に果たされているといつてよからう。

4.5.2 虎明本と虎寛本の『昆布売』の例

さて、ここで注目したいのは、(45)の例である。虎明本の『昆布売』の例について3.1に詳しく検討を施したが、(45)は虎寛本におけるその当該部分である。虎寛本の論理として、〈大名→X〉の場合「ナウナウ」を用いるのであれば、(45)はいわば合理的である。しかし、この例は虎明本であえて「シシ申」とされ、その非合理性を逆手に取った笑いの表現として機能していたはずである。

よってその演出が継承されるのであれば、虎寛本の(45)の例は、むしろ「ナウナウ、

シシ申」が用いられることが期待されるが、実際には「ナウナウ」が用いられる。考えられるのは、すでに虎寛本書写の段階において、虎明本『昆布売』の「シシ申」に付された「ナウへトモ云」の注記が持つ意味は理解されなくなっていたということである。すなわち虎明本でこの注記が付された理由は、3.1に述べた通り明らかだが、虎寛本の段階では「ナウナウ」と「シシ申」の対立が解消されていたため、虎明本を参照したとして、この注記については「シシ申」でも「ナウナウ」でも任意の使用でよい、という理解しか得られない。さらに虎寛本の段階で「シシ申」単独での使用はもはや存在しないから、ここであえてどちらかを選択するならば、「ナウナウ」を選択せざるを得ない。

繰り返しになるが、虎寛本当時の一般的な言語感覚からすれば、この場面では「ナウナウ」が相応しかつたはずである。よって、ここで「ナウナウ」が用いられるのはむしろ普通であり、虎明本において本来「ナウナウ」と言うところを謙って「シシ申」とした〈笑い〉そのものが、虎寛本では成立していないということになる。

この点については、虎寛が虎明本から受けた影響などを含め、今後より詳しい考察が必要である。また、注13、14からすると、これが大蔵流（弥右衛門派）というサークル内でのみの論理なのか、共時相における一般的な現象であったかについては慎重にならねばならない。今後の課題として共時的にも通時的にも、他流派のテキストとの比較を通じての検討が必要となる。

5 結論

「シシ申」「ナウナウ」「申々」は〈初対面の相手へのあいさつの呼びかけ〉という、1つの閉じた体系といえる。よってこれらは、4に述べたように体系としての自立的な変化を変遷を追いやすい。この変化は、「シシ申：申々／ナウナウ」とあったものが、体系の外形そのものは保ったまま、その内部の構造が変わったに過ぎない。すなわち構造の組み換えが行われたものである。

本稿では、「シシ申」の歴史の変容について、主に言語の経済の要求といった点から説明を施してきた。そもそも4.4に示したように「申」に「シイシイ（シシ）」を付け、「シシ申」という複合単位を生み出したのは、表現的欲求に従った結果であろう。それにより、新たに〈初対面の相手への最初の呼びかけ〉を担う語形式が生まれたのである。これによって呼びかけの感動詞全体の体系は複雑になっているといえる。

一方、「シシ申／申々／ナウナウ」〈「ナウナウ、シシ申」〉の場合は、細かく分かれていた部分を、一つの複合単位により包括的に担わせることで体系をシンプルにし、より静態的に進んでいっているともみられる。体系として把握していなければ、「ナウナウ、シシ申」は、「ナウナウ」と「シシ申」が単に複合化したのみでなく、実はそこに「申々」が紛れ込んでしまっていることには気づき得ない。「シシ申」と「申々」の関係が、〈初

対面の相手への最初の呼びかけ〉の通時的現象として重要であることは4.4に述べた通りである。

「シシ申」を通時的に眺めてみると、そこには「ナウナウ」や「申々」との関連の中から、体系の崩壊と再構というシステムティックな動きが見られる。3では、呼びかけの感動詞を共時的に体系として捉えることが作業仮設として有効であることを示したが、4で述べたような通時的な面においても、システムの効率化とそれに反する動きの張り合いという体系性を背景とした説明が可能である。本稿における構造言語学的立場からのアプローチの妥当性を示すことができたといえよう。

注

- 1) 大蔵弥右衛門虎明(大蔵流十三代宗家)書写。8冊、231番所収。
- 2) 大蔵弥右衛門虎寛(大蔵流十九代宗家)書写。7冊、165番所収。
- 3) 無論、文献上は仮名によって分節的に示されるが、実際の発音においては日本語の分節音に使われない音をもって発音されることも多く、むしろ音韻論外であることで、感動詞としての表現性が活かされる場合もあるであろう。古くは、母音連続の忌避が見られた上代において、『出雲国風土記』に「意字」という形式が見られることが夙に知られる。
- 4) 言うまでもなく感動詞は独立語であり、他の要素と統語的関係を持たない。よって感動詞は構文論の対象とはなりがたい。
- 5) 鈴木一彦(1973)「感動詞とは何か」(『品詞別日本文法講座6 接続詞・感動詞』、梅林博人(1996)「感動詞の位置」(『国文学 解釈と鑑賞』第61巻1号)などに詳しい。
- 6) 田窪(2005)、定延(2005)など。
- 7) 両者がバリエーションの関係にあることは、3.1.1に詳述する。
- 8) 山口(1984)、山崎(1963)など。
- 9) 流派、書写者は特定されていない。104番所収。
- 10) 山脇和泉初代元宜か二代目元永の書写で、和泉流の祖本と目される。上・下・抜書の3冊、222番所収。
- 11) もとよりそれ以前に存在しなかったわけではないことは、室町期の謡曲資料に見られる用例や、J. Rodriguezによる『日本大文典』の記述より明らかである。
- 12) 忠政書写。1冊、25番所収。鷲流宗家の仁右衛門系の台本と推定される。
- 13) 天理本のこの例は、茶を飲んで、代金を払わずにその場を後にしようとした僧に、茶屋が呼びかける場面である。以下に文脈を示す。()部分は筆者による。
シテ「二服ホドのむべし、さらばと云テ、
(茶屋)「しいへ申
シテ「なに事ぞ
(茶屋)「茶ガワリト云
シテ「茶ガワリトハ、なにの事ゾト云
よって、3.1.2以降詳述する、虎明本における「シシ申」とは用いられ方を異にする。これは流派による違いか、何らかの理由が存するか、天理本ではこの1例しか存在しないため現時点では判断しえない。同じく和泉流の台本である和泉家古本『六義』の『薩摩守』には「立テヨヒ返シテ、茶がわりを、ト云」とだけあって、確認が取れない。今後の課題としたい。
- 14) 忠政本のこの例は、茶屋が僧を呼びとめ茶を進める場面における、「いや御房様お茶をのうて御

され」という台詞に対し、欄外に付された書き込みの一部である。ここには、「○茶屋ヨリ なるへ 御房御茶参れ 呼かけニモスル」「シシ申御坊お茶マイル 中々」という書き込みがなされている。忠政本にも「シシ申」はこの1例しか見られないため、この場合の「ナウナウ」と「シシ申」の関係はただちに解釈できない。注13と併せて今後の課題とする。

- 15) 「御座る」は「こなた段階（第一段階）」、「おりやる」は「そなた段階（第二段階）」に整理される。
- 16) 先に述べたように、台詞を厳密にテキスト化するのは虎明本以降である。
- 17) 山脇和泉家3代目元信道甫書写。221曲。
- 18) 冠者「申々 蚊の精」「こなたの事でござるか 冠者「中々そなたの事じやが
「そなた」は、主に対等の相手に用いられる人称代名詞である（山崎1963ほか）。少なくとも、はっきりと上位・下位待遇をしてはいない。
- 19) 〈男→女〉が〈上位→下位〉と言い切れることは、もとよりできない。この点に関しては意見が分かれるところである。しかし〈男→女〉が〈対等〉であったとして、本稿の論理には影響がない。この例が〈対等〉であるならば、むしろ合理的であるともいえる。いずれにしても説明がつかないので、ここでは〈男→女〉の身分的上下関係については保留としたい。
- 20) 鷺流の芸論書『芸稽古伝』（1675～1724／延宝3～享保9）には「狂言計ニ用ル言葉」として、当時すでに狂言独自のことばになっていたと思われる語が挙げられており、そこでは流派による用語の相違を示す記述も見られる。たとえば「見サシメ 行シメ サシメ大蔵方ノ言葉」のようなもの。

資料

- 和泉流『狂言六義』天理図書館善本叢書と書之部編集委員会（1975～1976）『天理図書館善本叢書 狂言六義上・下・抜書』（八木書店）
- 和泉家古本『六義』芸能史研究会編（1975）「和泉家古本『六義』」『日本庶民文化史料集成 第4巻 狂言』（三一書房）
- 大蔵流『虎明本』笹野堅編（1943）『古本能狂言集』（臨川書店）
- 北原保雄・池田廣司（1972～1983）『大蔵流虎明本 狂言集の研究 本文編上・中・下』（表現社）
- 大蔵流『虎清本』林田明編（1972）「虎清本狂言」『近代語研究』第三集（武蔵野書院）
- 大蔵流『虎寛本』笹野堅（1942～1945）『大蔵虎寛本能狂言上・中・下』（岩波書店）
- 『狂言記外五十番』北原保雄・大倉浩（1997）『狂言記外五十番の研究』（勉誠社）
- 鷺流『忠政本』田口和夫（1979）「鷺流狂言『延宝・忠政本』翻刻・解説」（『静岡英和女学院短期大学紀要』11）
- 鷺流『芸稽古傳』天理図書館善本叢書と書之部編集委員会（1984）『天理図書館善本叢書 鷺流狂言 傳書 保教本』一（八木書店）
- 『天正本』古川久編（1964）『狂言古本二種』（わんや書店）
- 『日本大文典』土井忠生訳（1955）『ロドリゲス日本大文典』（三省堂）

引用文献

- 亀井孝・大藤時彦・山田俊雄編（1967）『日本語の歴史 4 移りゆく古代語』平凡社
- 河原修一（1996）「室町時代談話語の研究（Ⅱ）——呼びかけの表現——」『島根女子短期大学紀要』第34
- 金水敏（2008）「日本語史のインタフェースとは何か」『日本語史のインタフェース』岩波書店
- 田窪行則（2005）「感動詞の言語学的位置づけ」『言語』第34巻第11号 大修館書店
- 照井寛子（1983）「もしもし」『講座日本語の語彙 第11巻 語誌Ⅲ できる～わんぱく』明治書院

- 山口堯二(1984)「感動詞・間投詞・応答詞」鈴木一彦・林巨樹編『研究資料日本文法第4巻 修飾句・独立句編 副詞・連体詞・接続詞・感動詞』明治書院
- 山崎久之(1963)『国語待遇表現体系の歴史』武蔵野書院